

本書『法助動詞の底力』は英語（特に現代アメリカ英語）の助動詞の中で、いちばんよく使われる5つについて、その使い方を詳説したものです。（「法助動詞」という用語について、興味のある人はpp.012-013を参照してください）

読者の皆さんが中学・高校まで習った日本語の「古文」でもそうですが、助動詞というのはいろいろと複雑で、とても一筋縄ではいきません。英語の助動詞では、特に過去形の *could* や *might* や *would* が過去の時点を表さなかつたりするのを初めて知った人は、「なんで?!」と茫然自失したかもしれませんね。

それにもかかわらず、助動詞は英語であなたが何かを伝えようとするときに無くてはならないとても重要なものです。あなたの気持ちを適切に相手に伝える際に助動詞はすごく頼れる味方になります。

あなたが相手との人間関係にも気を配って、適切な丁寧度でことばを発しようとするとき、助動詞の知識は必須です。あなたがある出来事の生じる可能性を判断して、その可能性を正確に相手に伝えようとするとき、助動詞の知識は必須です。

人は単に、生じた事実だけを述べるのではありません。出来事に対する判断や評価や推測や感情なども相手に伝えようとします。そのときが助動詞の出番です。

私は長年日本で英語を教えてきましたが、日本で出回っている英文法の助動詞の記述には、かなり間違いが多いという感じを抱いてきました。15年以上前に T. D. Minton と、巷に流布する英文法の誤りを糺す本を作ろうと相談して『日本人の英文法』（研究社）を出しましたが、残念ながら、そのときから状況はあまり好転していないようです。

この『法助動詞の底力』は、あなたが実際に英語でしゃべるとき

に役立つ、というコンセプトのもとに作りました。現代、世界でいちばん通用している言語は英語で、その英語の中でもいちばん優勢なのはアメリカ英語ですから、アメリカ英語における法助動詞の使い方を正しく学ぼう、というのがこの本の主要テーマです。

本書は、法助動詞の学術的な専門書ではありませんから、法助動詞を理論的に分析し、そのすべてを分類しようとした本ではありません。車に例えて言えば、分厚い自動車工学の専門書ではなく、あなたが車を実際に運転するときに、正しく安全に運転できるための技術と知識を過不足なく展開した本です。

したがって、すべての法助動詞を網羅してはありません。あなたが話すときに、使って便利なもの、重要なものは詳説しました。反対に、話すときに使用頻度が低いもの、つまり実際にほとんど使わないもの、使わなくても済むものはこの本では取り扱っていません。対象外の法助動詞は以下のとおりです。

- ・まったく取り扱っていないもの：dare; ought; need; used to
- ・ごく軽くしか触れていないもの：shall; had better

各章を楽しんで読み進めていってください。そして各章末には理解度を測る「章末のまとめ 確認問題」を設けましたので、そこで自分の理解度をチェックできます。

この本をつくる過程で、以下の人々に助言を仰ぎ、また参考意見を聞きました。この紙面を借りて感謝申し上げます：

- ・ **Lauren Lasko** (US)
- ・ **Jessica Sugahara** (US)
- ・ **Eric Lawson** (US)
- ・ **Andrew Armstrong** (Ireland)
- ・ **Jonathan McPhee** (Canada)
- ・ **Todd Leroux** (Canada) (カッコ内は出身国)

この本が、あなたの英会話力の飛躍的向上に結びつくならば、著者としてこんなにうれしいことはありません。

2017年7月4日 (アメリカ独立記念日)

安武内 ひろし

(注) 文中のカタカナ英語はできる限り英語の原音に近い表記にしていますので、ふつうの表記とは異なっている場合もあります。ご了承ください。